

14  
リスク社会としての近代

## 前回のまとめ

社会の「マクドナルド化」とは、20世紀を通して生起してきた一連の合理化過程の頂点を概念化したものである。つまり、社会の一元的な管理とあらゆる分野でなされる徹底的なマニュアル化が進んだ。これは、人間的本質の技術的操作という意味で、現代社会の「環境管理型権力」の典型ともいえる。

## 今回の主題

今回は、近代社会のもう一つの側面を「リスク・危険」というキーワードで考えてみたい。U・ベックの『危険社会』の議論に依拠して、「リスク・危険」の生産と分配という側面から現代社会の一面を学ぶ。U・ベックの主張によれば、近代の産業化と科学技術の発展は社会に多大の恩恵をもたらしたが、その反面で環境的・技術的・社会的リスクも増大させた。しかも「リスク・危険」は個人に転嫁される場合が多い。

## KEYWORD

リスク(risk)

危険(danger)

再帰性

個人主義化

# リスク(risk)と危険(danger)

大澤真幸(2008)『不可能性の時代』岩波新書、「IV リスク社会再論」  
三上剛史(2010)『社会の思想—リスクと監視と個人化』学文社

- ①「リスク」という語の語源は、イタリア語の「risicare(リシカーレ)」は「勇気をもって試みる」との意味であり、選択や決断によるものであることが暗示されている。
- ②「リスク」という用語は、『危険社会』(U・ベック、1986年)の出版以来、多方面で使用されるようになった。同年の「チェルノブイリ原発事故」などがリスクをリアルなものとして体験させたが、日本では1995年に発生した「阪神大震災」の影響も大きい(さらに、2011年3月11日の東日本大震災および福島原発事故)。
- ③「リスク」は、自然災害のような危険一般(danger)と区別され、何らかの人為的操作・選択によってもたらされる将来的損害を指している。U・ベックはそれほど「リスク(risk)」と「危険(danger)」の区別にこだわっているわけではないが、N・ルーマンはこの二つを厳密に区別している。

③ N・ルーマンは、自分が決定に参加していないのに他者の決定によって被る「危険」と、自らの決定によって自らが被る将来的な「リスク」を区別した。防災や薬害、食品偽装などの問題では、行政や企業によって住民・消費者が「危険」にさらされることになるが、それは、自己の選択によって生ずる未来の「リスク」とは異なるという考え方である。

たとえば、貨幣や権力、科学が危険を「リスク」に変換する働きを担ったものであるという。経済システムにおける貨幣は「選択可能性の増大」させ、科学的知識は、科学的論争や仮説検証という「リスク」を伴うからである。

④ N・ルーマンの「リスク論」は、U・ベックのそれよりも「安全」に対して懐疑的な点であり、「コントロールのあるところではリスクも増大する」という、徹底した**不確定性の認識**である。この観点からすれば、しばしば行政のスローガンとなる「安全・安心社会」というものが、実は潜在する「リスク」から眼をそらし、行政の不行き届きを隠蔽しかねないものであることが理解される。

## 「宿命としての危険」

原子力発電所の事故による原子雲や微小粒子状物質(PM2.5)は、風向きや雨によって、「有刺鉄線、壁、軍隊、警察をも動員してその境界を守っている高度な文明社会」の無力さを如実に示している。

「近代化に伴う危険が国境によって制約されないために取り扱いにくいことが、危険の拡大の特徴である。危険が目に見えないために、少なくとも危険を受ける側には、それに対して何ら行動を起こす余地がほとんどない。危険は「副産物」として、他のものと一緒に飲み込まれたり、吸い込まれたりするものである。いわば、日常生活で消費される物に乗った「無賃乗車」のようなもので風に乗っかり、水に流れたりして移動する。・・・危険が今までとは異なった形で強制的に割り当てられることとなったのであり、いわば一種の**「文明社会の宿命としての危険状況」**が生じている」

ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』

(東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局、1998、58-59頁)。以下、引用に際しては『危険社会』。

## 自己批判社会としての「リスク社会」

「リスク社会は・・・自己批判社会でもある。保険の専門家は、(心ならずも)安全性の専門技術者と対立していく。安全性の専門技術者がリスクはゼロであると診断しても、保険の専門家は保険の対象にはならないと査定するからである。専門家は対立する立場の専門家によってその力を削がれたり、解任されていく。政治家は市民グループの抵抗にあい、義侠経営者は道徳的、政治的動機による消費者の組織的不買運動に直面していく。行政機関はセルフヘルプグループから批判されていく。」

(ウルリヒ・ベック「政治の再創造」『再帰的近代』松雄精文他訳、而立書房、1997年、26頁)

# 「リスク社会」という概念

## 「リスク社会」という概念と時代とシステムの変容

- ①近代工業社会と、自然資源や文化資源との関係でいえば、近代工業社会の構築は自然や文化資源に依存していたが、近代化の完成の結果、浪費されはじめている。
- ②社会が生み出す脅威や問題(科学・技術・医療・産業廃棄物・食品添加物等々)が、安全に関する社会的通念の基盤を凌駕している。そのため、従来の社会秩序の根本的前提を揺るがしかねない。
- ③集団に固有な意味供給源(階級意識や進歩に対する信仰)は枯渇し、解体し、魔力を失いはじめている。そうした意味供給源の喪失は、結果的にすべての意思決定作業を個人に委ねるようになる。

(ウルリヒ・ベック「政治の再創造」『再帰的近代』松雄精文他訳、而立書房、1997年、20頁)

## 「科学は真理と啓蒙から遠く離れてしまったか」

「かつては「外界(神、自然)」を原因として発生した危険が人々を苦しめていた。これに対して今日では歴史的に新しい性質をもった危険、すなわち科学の構造と社会の構造にその原因をもつ危険が問題となっている。しかも、それは三重の意味をもって問題となっている。つまり、**科学は、危険に対して、その原因でもあり、その本質を明らかにする媒体でもあり、また解決の源でもある。**さらに、このことによって科学化にとっての新しいマーケットを提供するのである。科学が自らの手で造り出し、自らが定義した危険と、それに対する大衆による批判との相互作用のなかで、科学技術の発展は矛盾に充ちたものになる」

(『危険社会』317頁)

## 「現代医学の発展がもたらした診断と治療の分裂という事実」

「自然科学の技術を用いた診断用機器、多様な発展を遂げた精神分析学説と医学専門語彙、人間の体と心をくまなく探求する科学主義的好奇心。これらは見たところ明らかに治療の守備範囲から抜け出して独り歩きを始めただけではない。今では治療が追いつくことさえ難しいところまでできている」(『危険社会』410頁)

「医学は十九世紀のヨーロッパにおいて職業集団として発展を遂げ、苦痛を技術によって取り去るようになった。そして、医学はそのような治療を職業上独占して管理するまでになった。この結果、いわば病気と苦痛は、専門家の独断で一括されて医学の研究施設に送り込まれた。そして、立ち並んだ「病院」で並び分けられ、医者によって、患者には知らされない何らかの方法で治療を受けたのである。今日では、これと全く逆である。患者たちは今まで自分の病気に関しては徹底的に無能者扱いを受けてきたが、今度は好きなようにと任されている。そして、患者と同様に病気にどう対応してよいのかわからない家族、会社、学校、世間などのもとに放置されている。」(『危険社会』412頁)

## インフォームド・コンセント (Informed Consent)

インフォームド・コンセントとは、医療従事者が患者に対して、治療方法やリスクなどに関する十分な説明をし、患者側の理解、選択、納得、同意のもとで治療方法などを選択あるいは同意させる方法を指す。

### <患者の自己決定と自己責任>

かつてのように、医者はある病気に関しては原因や治療法などに関する「真理」を知っており、患者は無条件にそれに従っていたが、現代では、医者でさえも真理を知らず、適切な処置に確信が持てない、または責任が取れないという側面が強くなり、患者の自己決定や自己責任が強調される。

## 「再帰的(reflexive)近代」

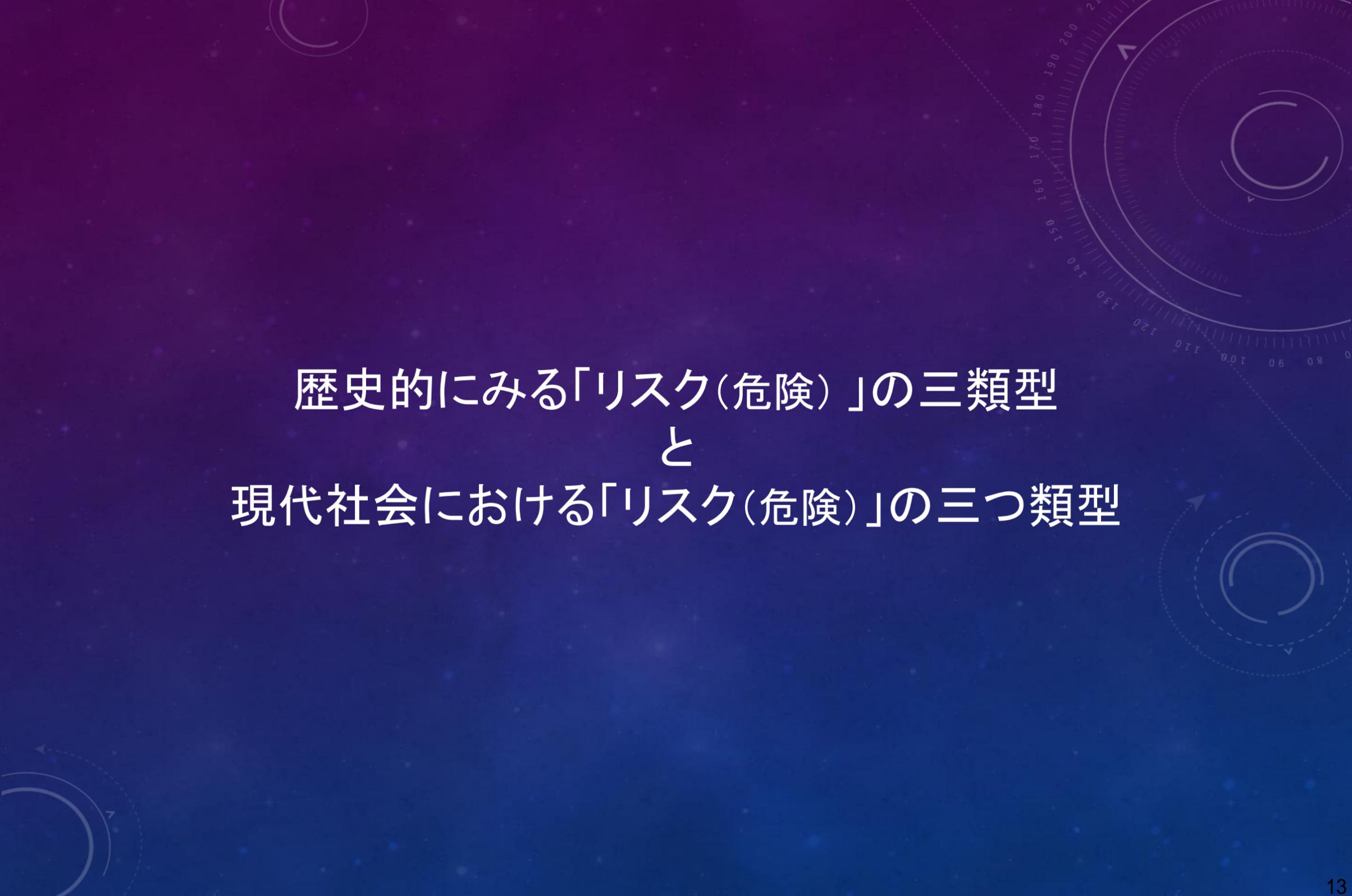
近代社会は、近代そのものが生み出した制度や科学技術のさまざまな影響を、「再帰的」(自分に再び振りかかってくる)に体験することになった。

それゆえに・・・、常に自らを反省的にモニターし、自己点検を編集を繰り返しながら自己を創造しなくてはならない社会観である。したがって、再帰的近代という言葉は、事実としての**制度的な再帰性**(近代が近代の限界を生み、近代自信が近代の生まれ変わりを要求している)という側面と、そこに生きる人間や集団が、自らの生活態度を反照的に組み立て、いつも自己をモニターし再帰的(自分自身の反省を再編集)に生きる必要性が出てきたという、**主観的な側面**とを持っている。

三上剛史『社会の思想－リスクと監視と個人化』学文社、2010年、27頁

近代社会においては、その規範への反省的・再帰的な態度が浸透し、常態化している。すなわち、規範を「変えることができる/変えるべきである」との自覚を前提にして、規範が不断にモニタリングされ、修正や調整がほどこされる。

ポスト冷戦期の理論社会学における中心的な概念。この語を自身の理論の鍵概念として用いているギデنز、A.によれば、近代社会は再帰的に構成される社会である。伝統社会においても私たちは、自分の行為が伝統にかなうものであるかを確認しながら行為していた（再帰的モニタリング）。しかし近代社会においては、社会制度そのものがこれまでの自らの経緯を振り返りつつ修正されていくという再帰的なプロセスで営まれている。そのことで、社会科学を含む科学的知識も、科学的であるというだけで正統性を保持することはできなくなった、と彼は主張する…近代の再帰性は、あらゆるものごとに不確かさの感覚をもたらし、個人に対してさまざまな場面で自己決定を要求する。こうした要求が強まった社会をギデنزらは後期近代と呼ぶ。後期近代においては、右派のように伝統を無根拠に信じることができただけでなく、かつての左派とは異なる形で再帰的近代に見合った社会制度への革新も必要になる



歴史的にみる「リスク(危険)」の三類型  
と  
現代社会における「リスク(危険)」の三つ類型

## 歴史的にみる「リスク(危険)」の三類型

- ①初期資本主義の企業家や遠隔地貿易に伴う危険などの「**伝統的リスク**」  
一定の仕事や職業に付随する「リスク」である(保険の起源の一つが海難事故であった)。
- ②失業や労働災害など、近代産業社会がその福祉国家的保険制度の対象として社会的に保障しようとした「**産業－福祉国家的リスク**」  
  
不特定多数の労働者や市民が、一定の統計的確立において被らざるを得ないような事故・災害・失業・生活破綻、疾病などを指す「リスク」である。そこで、発生する産業的・社会的リスクを保障する社会保障システム(失業保険、健保険、年金、生活保護等々)が整備された。
- ③現代の「**新しいリスク**」

「新しいリスク」は、「産業－福祉国家」枠組には収まらない「リスク」を指す。たとえば、原発事故や残留農薬、核廃棄物、薬害などの、近代科学が一定の水準を超えたレベルに達したがゆえに引き起こす、科学が生み出したにもかかわらず科学によって明確な予測も解決もできない「リスク」である。

# 「リスク」対応のパラダイム

## 「責任」パラダイム

19世紀までの近代初期



不確実性に対する〈予見〉



「伝統的リスク」

特定職業・身分に関わる自己責任主義であり、個人が自らの予見によって用心し備えるもの

## 「連帯」のパラダイム

20世紀への転換期



不確実性に対する〈予防〉



「産業—福祉国家的リスク」

伝染病や労働災害などの「リスク」を社会全体でカバーしようとするものであり、因果関係を特定して損害を最小限に抑えようとする。  
(予防注射のように災厄と予防法が1対1に対応した予防のシステム)

## 「警戒」のパラダイム

現代社会



不確実性に対する〈警戒〉



「新しいリスク」

いつ何がどこで起こるか分からないため、あらゆる潜在的危険性を洗い出し、それらをあらかじめ排除するもの(人間ドック、癌、テロ)

## 「リスク」と連帯基盤の変化

「**困窮**による連帯」

平等性を求める産業社会



〈富の生産と分配〉

産業社会は皆が豊かになることを「渴望」し、それを原動力としつつ「平等」の理念に支えられることによって運営されてきた。

「**不安**による連帯」

リスクへの不安に基づく



〈リスクの生産と分配〉

「リスク社会」では、「リスク」への「不安」が原動力となり、これを解決するための「安全・安心」を追求することが社会運営の根幹となる。

## 「困窮によって生じた連帯から不安によって生じた連帯への移行か」

「危険のもつ政治的な帰結は多義的である。・・・社会が階級社会から危険社会へと移行するとき、共有という関係の質も変わり始める。・・・階級社会の発展力は、平等という理想とつねにかかわっている。（たとえば、「機会均等」に始まって、社会主義的な社会のさまざまなモデルに至るまで、多様な形態の理想が見られる。）

しかし、・・・危険社会の基礎となり、社会を動かしている規範的な対立概念は、安全性である。危険社会には「不平等」社会の価値体系に代わって、「不安」社会の価値体系が現れる。・・・つまり、**危険社会では、階級社会にみられる欠乏の共有に代わって、不安の共有がみられる。**この意味で、危険社会という社会形態の特徴は不安からの連帯が生じ、それが政治的な力となることにある。」（『危険社会』75頁）

# 現代社会における「リスク(危険)」の三つ類型

- ①地球温暖化や生態系の破壊などの「**環境的リスク(危険)**」
- ②遺伝子操作や原子力発電や食品添加物などの「**技術的リスク(危険)**」
- ③治安の悪化や就労形態の不安定化(失業を含む)、などの「**社会的リスク(危険)**」

## 「リスク(危険)」の個人への転嫁

生命を脅かす環境的・技術的「リスク」だけでなく、社会的「リスク」(人間生活を支えてきた、男女関係、家族や職業労働の在り方についてのリスク)も高まる。しかし、この社会的「リスク」は、近代化により一層の個人化が進むことで、「リスク」分配に関する緩衝地帯(共同体や集団)を乗り越えて、直接個人に分配される傾向が高まることである。

## 個人的「リスク」の典型としての失業

「大量失業は、個人化という条件の下では、個人的運命として人間に負わされる。人間は、もはや社会的に公然とした形ではなく、しかも集団的にでもなく、個々人の人生の局面において、失業という運命に見舞われる。失業という運命に見舞われた者は、自分一人でそれに耐え忍ばなくてはならない」(『危険社会』174頁)

## 「個人化の二律違反(アンビバレンツ)」

「個人化は、・・・生活状況の制度化と標準化とをともなってあらわれる。解放された個々人は、労働市場に依存しており、そのために、教育や消費や社会保障法の規定や給付に依存し、交通計画や消費財の供給に依存し、医学や心理学や教育学の助言や助力の能力や型に依存している。これらすべては、『制度に依存した個々人の状況』に対する特別な統制構造があることを示している。」

(『危険社会』142頁)

## 「リスクの個人化」

「リストラ」、非正規雇用、年金破綻、生活習慣病・・・等など、近代社会がこれまで整備してきた皆を一律にケアする集団的・社会的仕組み(福祉国家のシステム)が危機に瀕し、「新しいリスク」に対処できなくなった。それにも関わらず、その破壊力は「個人の身体」に集中し、個人は自らの責任でその「リスク」を背負わなければならなくなった。

## まとめ

- ①「リスク」は、自然災害のような危険一般(danger)と区別され、何らかの人為的操作・選択によってもたらされる将来的損害を意味する用語である。
- ②生産力の発達に伴う富の配分は階級的で所有するものだったが、「リスク」は、(例:放射能、空気、水、食品中の有害物質と、それが及ぼす植物、動物、人間に対する短期的、長期的影響)その階級の図式を破壊するブーメラン効果を内包している。富める者も、権力を有する者も、「リスク」に曝されるのである。
- ③産業社会における生活様式(労働と生活の分離)は核家族(性別役割分業による「労働」と「労働力」の再生産)を基盤としていたが、それが流動的なものとなり、そこから生じる「不安と不確実さ」(「リスク」)の克服は個々人に委ねられるようになった(個人化された「非独立者の社会」)。
- ④科学は、危険に対して、その原因でもあり、その本質を明らかにする媒体でもあり、また解決の源でもある。

⑤近代化との関係で「危険社会」を克服する道はどこにあるのか。

U・ベックは、近代化を「楽観的」または「悲観的」に捉える立場のいずれもとらない。彼によれば、現代の近代は近代化が半面的にしか実現しなかった状態であるから、「リスク(危険)」の発生・増大もそれとかかわっていると看做す。そのため、科学や政治(さらには家族と雇用など)の各分野で未来志向的で理想的な近代化を徹底して行うことによって、危険を克服することができるという。

⑥「リスク(危険)」克服のための具体的な方法

・科学や技術や企業や医学などによって生み出される危険に対して、議会による民主的統制の強化が必要である。

・「リスク(危険)」を生み出す側にたつ既存の科学や専門家に対して、同様に専門的知識をもちつつもそれに対して異議を唱える対抗科学や対抗専門家に、その可能性を見出そうとした。